

● サンゴ礁を利用した沖縄の古い民具

西平守孝

裾礁に取り囲まれた琉球列島の島々では、人々は古くからサンゴ礁と深くかかわり、さまざまな形でサンゴ礁の恵みを受けてきた。サンゴ礁の多様な環境に棲息する生物を食糧として利用するばかりでなく、それらの骨格の形態的特徴を活かして、さまざまな方法で利用した（上江洲 1973, 1982；西平 1988, 1990）。その利用は多岐にわたり、建材、住居、調理、飲食、喫煙、食品貯蔵用具、呪術や装身具などの民具から子供のおもちゃに至るまで極めて多様である。ここでは、これらのうちいくつかを紹介しよう。

サンゴの利用

建造物への利用：世界文化遺産に登録された首里城の美しい城壁をはじめ、多くの建築物の建材として琉球石灰岩が使われている。首里金城町の石畳も民家の石垣も、整形された石灰岩やサンゴ石（サンゴの古い骨格堆積物で、ここではサンゴ石と表現する）を積み上げて築かれている。これらの石材は元はといえばサンゴ礁の産物である。往時の有力な権力者たちの屋敷などでは、巨大な塊状ハマサンゴを整形して築いた美しい石垣も多く見られる。巨大な塊状ハマサンゴのきめ細かな骨格は加工・整形が極めて容易である、という特徴を活かしている。一般の民家の石垣の多くはサンゴ石をわずかに加工したものや、ほとんど加工せず原型をとどめたままの状態に乱積みされたものも多い。テーブル状のサンゴを生時とは逆に横積みにした石垣もあり、巧みな積み上げがなされている。崩れた際の補修など維持に手間がかかる上に、ハブが入り込める隙間が多いことなどの理由で、多くの集落で石垣がブロック塀

に代わりつつある。時代の流れとはいえ、ある意味で残念なことである。また、木造家屋の柱の礎石として、キクメイシ類をはじめ、ハマサンゴ類、ノウサンゴ類などの半球形の塊状サンゴが用いられていた。大形有孔虫の遺骸が固結してできた粟石も、切り出して建材として使われている。

石厨子：洗骨後の骨を納める厨子がめは古くは板厨子もあったが、17世紀末からは石製や陶製が多いという。サンゴ石でできた厨子の大部分は、17世紀末～20世紀初頭にかけて見られ、塊状ハマサンゴが用いられている。サンゴ礁海域ではこれより優れた代替えの素材がないほどサンゴの骨格の性質を巧みに利用したものである。

麦摺り石：ノウサンゴやキクメイシ類の大型群体の骨格を厚手の板状に整え、その表面の細かな凹凸を利用して麦の脱穀に用いた道具が麦摺り石である。円卓状で突出部の低いミドリイシ類を利用した麦摺り石もある。

サンゴ染：サンゴの骨格が装飾用に使われることは広く見られることであるが、最近考案されたものに、サンゴの骨格の内部構造の面白さを活かした独特の利用法がある。それは「サンゴ染」で、主としてキクメイシ科の塊状サンゴの骨格の内部構造のさまざまな造形を布に写し取って染め上げたもので、沖縄ならではのサンゴの利用法である。サンゴの種類により、また成長方向と切断面の角度によって変化するさまざまな文様を、巧みに写し取って彩色し

た「サンゴ染」は、極めてユニークなサンゴの利用から生まれた美しい染め物である。手軽な物としては、Tシャツやハンカチのサンゴ染もある。

貝その他の動物を利用した民具

パイプウニの棘や殻で作った風鈴、星砂を樹脂に埋め込んだキーホルダーやペンダント、貝を磨き上げたり切断して作ったさまざまな装飾品などは新しいもので、土産品店などでよく目にする。古くは素朴な子供の遊びにいろいろな動物の殻が使われた。チョウセンサザエの貝蓋、キイロダカラやハナビラダカラなど小型のタカラガイ類はおはじきに使われ、ホシダカラなど大型の種は紐をつけて「牛」よろしく引きずって遊ぶ。イモガイ類やマガキガイなどでは、原形のままか貝の上半分を割り取って、独楽が作られた。どのような物でも、その特徴を活かして玩具に仕立て上げた。

貝の利用は極めて多様であった。古い遺跡から貝輪や貝斧などの道具や装身具が出土し、タカラガイ類が貨幣として用いられたことはよく知られている。古くからハナマルユキやホシダカラの背面を割り取り、そで網の下端に適切な間隔を置いていくつも縛り付け、網の錘に使われた。この網は高さ2メートル長さ数メートル程度の小さなもので、サンゴ礁の割れ目に張って小規模な追い込み漁に用いられた。ヒメジャコの殻も、その背側に孔を開けて同様に割り付け、網の錘として用いられた。ヒレジャコなど大型シャコガイ類は、魔よけの意味を込めて門柱や石垣の上に外向きにおかれ、スイジガイも畜舎の入り口などに紐で吊して魔よけとして利用された。ま

たその構造から吊り鉤としても使われた。ホラガイは中央部に孔を開け、また木をねじ込んで柄をつけ、吊り鉤にかけて湯沸かしとして利用した。大型の二枚貝やオオベッコウザラは柄杓などに使われた。貝類はその他にも多くの民具に利用されていた。

生活様式の変化や考え方の変化によって、サンゴ礁の生物を知り尽くしたうえで生活のさまざまな場面で活用し、その恵みを受けてきた素朴な風習や文化が失われつつある。



写真
 左上：サンゴ石やサンゴ礁石灰岩を積み上げて築いた石垣（伊計島）
 左中：門柱の上におかれたシャコガイの魔よけ（伊計島）
 左下：ホラガイで作った湯沸かし（沖縄県立博物館所蔵）
 中上：サンゴ染（琉染で撮影）
 中下：麦摺り石（沖縄県立博物館所蔵）
 右上：スイジガイの魔よけ。通常とは異なり、椰子の木にかけられている。（伊計島）
 右中：ホシダカラで作った錘をつけた網（沖縄県立博物館所蔵）
 右下：塊状ハマサンゴの骨格で作った石厨子（沖縄県立博物館所蔵）